
赤銅色のプラネス

Monyu

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤銅色のブラネス

【Nコード】

N6802X

【作者名】

Monyu

【あらすじ】

犯罪者と獣人が住む”獄街”で暮らすアスナは、妹を養いながらそこで生きていくために盗賊として生きること余儀なくされる。それから月日がたち、幸運にも妹はその身体能力の高さから騎士になり、アスナはのんびりとその日暮らしをするための日銭稼ぎ程度に盗賊稼業をこなしていた。そんなある日、所属する盗賊ギルドから変わった依頼を受け、その日を境に歴史を動かす大事に巻き込まれるお話。

プロローグ（前書き）

基本的に不定期更新の息抜き小説です。それでもよければお付き合いください。

ブローグ

砂と岩しかない荒野に風が荒れ狂ったよう吹いている。その風は薄く黄ばんだ小汚いコート裾を弄び、大地の大部分を構成している砂を巻き上げる。その砂から体を守るようにコートの襟を握りしめ、固定する。

「あの娘が関わってなかったら、絶対に断ってたのに」

フードの中からちらりと見えるその顔には、瞳を守るようにゴーグルがつけられ、そのゴーグル越しの瞳は赤銅色だ。フードの中にしまいきれずに少しばかり出てきている赤銅色の髪は、砂交じりの風に長くさらされていたため、砂があちこちについている。

舗装された道を歩くのと異なり、砂に足をとられ一步一步が非常に重く、高確率で混じっている大人の握りこぶしサイズの石がその歩みをさらに遅くさせた。すでに疲労困憊で立っているのも一苦労だが、それでも足を止めずに目的地へと歩みを進める。

不意に風が止み、それに伴い俯き加減に歩いていた顔をあげる。眼前に広がる巨大な門は、ブロック状の岩を積み重ねて作った壁に取り付けられており、その高さは、20メートルはあった。

依頼の書類に書いてあった”門の左側から、さらに左側に4つ、下から23のブロックを押せ”という指示通りにブロックを押すと、低い轟音とともに門が開いた。

招かれるままに門をくぐりその中へと入るなり、赤銅色の瞳は驚きのあまり大きく見開かれた。

「なにこれ？」

均等に分けられた区画に、ほとんど同じづくりの直方体の建物が

ずらりと並んでおり、舗装された道路は、今まで見たことないほど平坦で何の障害もない。そして、その上を小型の乗り物が超低空飛行で走っていた。

胎動

第一話 胎動

「待ちなさいっ!!」

後方から必死に追いかけてくる茶髪の少女は、騎士団創設以来初めて的女騎士で、私の妹、アス力である。獄街という地獄で私と共に幼少期を暮らしていた割には、真っすぐに正義感の強い良い娘に育っている。

私はぴたりと足を止め、追いかけている少女の方へと向き直る。先程まで勢いの良かったアス力は、同様に足を止め、警戒しながら確保の機会をうかがっている。

「あなたのような人がいるから、私たち獣人と人間が分かりあえないのよ。お願い だから改心して、まっとうに生きて」

新緑の瞳は真っすぐにこちらを見据えている。その瞳はどこまでも純粹で言葉以上の他意がないことが伺える。そのアス力らしいセリフと表情に思わず笑みがこぼれる。その笑みを異なる解釈で捉えたアス力は、さらに語気を強めて言い募る。

「確かに人間のやっていることは、ひどいかもしいない。でも、相手に出来る限りの好意で接すれば、いつかきつと分かってくれるだから…」

どこまでも甘くて優しい私の妹。その言葉は、少なからず守られて生きてきた者が吐くセリフだ。誰にも守られず、ただひたすらに迫害され、それでも死に物狂いで生きてきた私たちには響かない。

音を出さずに口だけで、またね、と伝えて腰に携えていた閃光弾を放つ。アス力がきやあつと小さな悲鳴をあげ、目をくらましているうちに窓から外へと出て行く。

「待つて、お願いっ!!」

未だに視力が回復していないだろうに、アス力は必死になって腕で私を探り捉えようとしていた。その様子を横目に外に出て、目的の書斎へと向かう。その方向は、アス力やその他騎士たちが足止めされている建物とは反対方向にある。

怪盗のごとく予告状を出したわけでもないのに、盗賊（と言っても単独行動だが）の襲来を予期していた王城に違和感を覚え、目的地と逆方向に騎士たちを誘導した結果だ。

少し時間がかかり過ぎかしら？長居は無用ね。

さつさと王城からおさらばするに越したことはないが、まだ目的の物を手に入れていない。別館に到着し、3階にある宰相の書斎へと向かう。

その際に全く警護されていないことに違和感を感じなかったのは、先に反対側の本館へとその警護を誘導したせいなのだが、後にそのこと多い後悔することになる。特に何の障害もなくついた宰相の書斎で目的の物である”アンチクティ”と書かれた書類を手にとり、アスナはあることを思い出したため息をついた。

獄街で生きていくために盗賊になったアスナが所属する盗賊ギルドでのことだ。日銭が底をついてきたアスナは、何か依頼がないかと盗賊ギルドを訪ねると珍しく指名の依頼が入っていた。

最近、アス力が騎士になり盗賊稼業がやりづらくなっていたアスナにとって、その依頼はとても魅力的だった。内容は簡単なものだが、賃金はそれに以上に良いものだったからだ。数年はその稼業をしなくても済む額に即決したのだ。しかし、今考えると怪しいことこの上ない依頼だ。宰相の書斎にある資料を盗んでくる、それだけ

の内容でその額なのだからそれなりの理由があるのは当たり前だ。

現に予告状を出したわけでもないのに、その侵入が事前にはばれており、資料を手に行っている自分の背後には人が立っている。

「このようところで何をしているのですか？」

背後に立っている男は赤銅色の長髪の獣人がそこに立っているにも関わらず、淡々と質問をしてくる。軽くジャンプをし、背後に立つ男の頭を手について飛び越え、その男の背後に立つ。後ろを向いていて顔を伺うことができないが、薄い藍の髪と細身の体型から、この男が宰相であることを理解する。歴代最年少の宰相は、その頭脳と冷徹さからよく恨みや妬みを込めて”氷の魔王”と噂されている。

「欲しいものがあつたから貰いに来たのよ。これ頂くわね」

宰相の質問に答え、さつさと退出しようと戸の方へと向き直り驚く。いつの間にかもう一人この部屋にいたらしく、腕を組んだ少年が立っていた。年のころはアスカと同じ16歳と言ったところだろうか。月の光に照らされて、その金髪がキラキラと輝いている。

「逃がしはしない。おとなしくしもらおうか」

年の割に落ち着いた口調で話す少年は、その雰囲気と威圧感から第三皇子のドルニエだろう。十数人いる皇子のなかで、次期王位継承者として一番期待されている皇子と噂されているのは聞いたことがある。

「リーガル、捕えろ」

後方に立っていた宰相が動き出す気配を感じ、振り向くとその手には新緑の翡翠がついた杖が握られていた。その口から呪文のようなものが紡ぎだされており、本格的にヤバそうな雰囲気醸し出している。何とか距離をとろうとドル二エのいる戸の方へと後ずさる。後方からは金属が擦れるような高い無機質な音がする。どうやら、ドル二エが帯刀していた剣を抜いたらしい。

焦る気持ちを落ち着けるために、一度目を瞑りそれから、くるとドル二エに向き直りそのままの勢いで突進する。向かってくるアスナに臨戦態勢でむかえるドル二エの足の間へとそのまま体を滑り込ませる。そのアーチをスルリと通り抜け、そのまま廊下を走り去ろうと立ちあがった瞬間、風を切るような高い音と共に衝撃波が首元を掠る。

「っ」

鋭い痛みが首元にはしり、耳に着けていたガーネットのイヤリングが床へと落ちる。よろめきそうになる態勢を何とか立て直し、そのままの勢いで廊下を駆け抜け、窓から外へと脱出する。後ろの方で、悪態をつく声が聞こえたがそれを無視して王城から抜け出す。

何とか我が家に着いたアスナは、自分の家を見渡す。何も無い殺風景な部屋には、ベットと机以外には何も存在しない。特に荒らされた様子もないし、誰かがいる様子もないよね。鍵をかけようがかけてまいが、この無法地帯の獄街に女が一人で住んでいれば空き巣も入るし、変態も入る。貞操の危機何て言うのは、日常茶飯事だったりする。それでもきちんと熟睡できるのは、亡き父が残した魔道具のおかげだ。

いつものように机の上に無造作に置かれた口ウに火を灯す。一見何て事のないこの口ウは、その火が消えない限り来訪者を無断で侵

入することを防いでくれる魔道具の一種だ。その原理も仕組みも全く分からないが、これのおかげで夜熟睡できるのは事実だった。

疲れてご飯も食べる気にならないアスナの足はまっすぐとベットへと向かう。ボフリとベットに体を倒し、アスナのことを考える。

『あなたのような人がいるから、私たち獣人と人間が分かりあえないのよ。お願い だから改心して、まっとうに生きて』

『確かに人間のやっていることは、ひどいかもしれない。でも、相手に出来る限りの好意で接すれば、いつかきつと分かってくれるだから…』

自分を捕えようとするときにアスナはいつも説得を試みた。獣人と人間が住むこの世界で、人間は獣人を忌み嫌い、迫害した。それがいつから始まったのかは知らない。ただ、私が生まれたときには既に当り前のように迫害されていた。そしてその迫害されている獣人が住む地域を”獄街”と呼ぶ。この獄街は特に整備もされず、上下水道の設備があるわけもなく、略奪と殺戮が繰り返され、疫病が蔓延している。

そんなところで12年間だけとはいえ、アスナは暮らしていたのだ。何度も殺されそうになり、犯されそうになったにも関わらず、彼女は獣人と人間が仲良く暮らす世界を望み、そして行動した。その結果が騎士なのである。何にも汚されず、純粹で真つすぐな妹を守るためとは言え、その身を犯罪者に落としたと知ればアスナは悲しみ、そして苦しむだろう。

アスナは枕に顔を突っ込み、ぐりぐりと左右に頭を振る。こんなことを考えても仕方ない。他に生きる術を見つけれなかったのだから。そう思いなおしアスナは、獄街について考える。

獣人の住むこの地域には、獣人以外にも何かしらの大きな罪を犯した人間が住んでいる。そんな獄街を統治しているのがギルドだ。

ギルドには様々なものがあるが、基本的には上流階級の人間が後ろ暗い依頼を頼むときに何回か間を挟んで、このギルドへと依頼が舞い込んでくる。そしてその依頼をこなすことだけが、この地域に住む者を傷つけずに手に入れられる収入となっている。

まあ、もつともギルド自体がこの獄街に法律ほどでなくとも秩序をもたらすために亡き父が創設したもので、獄街に住む者同士での殺戮や強奪を減らすためという目的も持っていた。その願いは完全に叶うことはなかったが、それでもギルドができる前よりはマシになったらしい。私が生まれたときには既に存在していたため、自分では比較のしようがない。

そこまで考えてアスナは、眠りについた。落ちて行く意識の中で、今日の成果物をギルドに届けなきゃなっと思いつながら夢へと落ちた。

カーテンがない窓から朝日が差し込み、その眩しさに目が覚める。疲れのあまり布団もかけずにそのまま寝てしまったらしい。ぼりぼりつと頭をかき、大きく欠伸をして洗面所へとむかう。

盗賊稼業のついでに上流階級のお家から水道水を頂戴してきた。

その水を使って顔を洗い、髪を櫛で梳く。

腰まである長い髪は基本的に結ばずそのままにしている。鏡で身だしなみをチェックしているときにふと違和感に気付く。いつもつけているはずのイヤリングが片方ない。いつ落としたのだろうと記憶をたどり、冷やりとした汗が垂れる。昨晚、王城に侵入したときに落としたのだ。

証拠品にすらならない物なので落としたこと自体はそれほど問題ではない。問題なのは、このイヤリングが魔道具でそれをつけている間は流れている猫の獣人の姿に見えていることだ。もうもふの毛皮に猫の耳に尻尾。

確かに私は獣人だが、その血はかなり薄い。ほとんど人間と変わらないのである。ただ、その身体能力と夜目が利き、異常に鼻がい

いぐらいで、それ以外は別段人間と変わらない。だからこそ、獣人の格好して盗賊をしていたのである。

静かに残っている方のイヤリングを外しポケットにしまいこむ。大きく息を吸い込んでからゆっくりと息を吐く。大丈夫、夜は暗いし逃走途中だったからはつきりとは目撃されていない。人物を特定できるほど近くで見られたわけではない。

落ち着くように自分に言い聞かせ、さっさとギルドに成果物を渡そうと決意する。出かける準備を終え、机の上で揺らめいている炎に息を吹きかけて消す。戸に手をかけ、開けたところでアスナは硬直した。その眼前にいたのは、薄い藍の髪をした宰相と茶髪の少女もとい愛する妹アスナだった。

妹の願い

「ただいま、お姉ちゃん」

きめ細やかな肌を桃色に上気させ、新緑の瞳を細めて満面の笑みを浮かべている。無邪気に笑うアスカの後ろには、先日忍びこんだ城の宰相が控えてる。

「お帰り、アスカ」

アスナの心臓は張り裂けんばかりの勢いで脈打っている。その原因は主に妹の急な帰宅ではなくその後方にいる宰相によるものだ。

昨夜、城に忍びこんだのがばれてしまったのだろうか。いくらイヤリングの片方を落としたからってそんなにすぐにばれるわけがない。コンマ数秒の内にそこまで考え、平静を装って宰相に視線をじつくりと巡らせてからアスカに問うた。

「で、その後ろにいる人は誰なの？」

宰相は、この獄街にはおおよそ不釣りないな高貴な立ち振る舞いである。触り心地の良さそうな布で作られたズボンに、簡素なけれどガラス細工のように繊細な模様がところどころアクセントとしてちりばめられているコート、首元や手首などからは、白い絹のシャツのひらひらが見えている。この獄街でその格好では、襲われても文句は言えない。

「はじめまして、リーガル・フロンと申します」

アスナが答えるよりも先にリーガルは、軽く礼をして自己紹介をする。髪よりも濃い藍の瞳がアスカを真つすぐに見据える。

「ご丁寧にどうも。私はアスナ。知ってるだろうけどアスカの姉よ。立ち話もなんだし中に入って」

お互いに簡単な自己紹介を終えたので、アスカとリーガルを家の中へと招く。

「適当なところに座って頂戴」

家の中にはベットとその脇に置いてある小さな机以外特になにもないので、ベットの方を指さして座るように促す。アスカはかつてこの家にいたときのようにベットへと腰をおろし、枕を抱えている。一方で予想以上になにもない部屋に戸惑いを隠せないリーガルは困ったように佇んでいる。

ほとんど客人の来ないこの家に椅子なんてものは存在しないので、仕方なく椅子の代わりになりそうなものを探していると、かつて果物が入っていた木箱が家の片隅に無造作に置かれているのを見つける。

長い間放置されていたため、埃だらけではあるがそれほど木箱自体は痛んでおらず座るには問題なさそうだ。ほこりを払うと窓から指している日の光の中をふわりふわりと雪のように舞う。見た目とは裏腹にその埃は喉や肺を刺激し咳を誘発する。

「お姉ちゃん大丈夫？」

「ん。大丈夫。それよりもその枕貸してもらえん？」

枕を抱き込んだまま駆け寄ってきたアスカにお願いすると、アス

力はきよとんと目を丸くして「いいよ」と承諾して枕を手渡す。もとより特に手入れをされていなかった枕は平坦に潰れていたが、アス力が抱きかかえていたことによって、中身の羽根が偏り歪な曲線を描いている。

見つけた木箱をリーガルの側に置き、その上に枕をかぶせる。木箱のささくれが枕に刺さるのは嫌だが、宰相”様”の臀部にささつて嫌味を言われるのも何だか面倒なのでとりあえず我慢をしておく。

「粗末なもので悪いんだけど床に座るよりはましでしょ」

リーガルに今度こそ座るように勧める。ベットに座るといつの間にかアス力がベットに移動していた。

重厚な装備をしているアス力がお行儀よくベットに座る姿に何とも言えない違和感を覚える。胸はもちろんのこと、肩、腕、脚、スネとそんなに鉄鋼着けて重くないのだろうか。どうでもいいことを考えていたら、リーガルがご丁寧に

「それでは失礼します」

と言ってから苦笑を浮かべつつその簡素な”椅子”に腰をおろした。高級な出で立ちとその”椅子”との対比は何とも異様な組み合わせだ。見る人が見たら笑いを誘うものだろう。

「それで、わざわざこんな時期に宰相様と一緒に帰ってきたのは何でかしら？」

帰ってきたときの無邪気な表情とは打って変わって、真剣な引き締まった表情で説明を始めた。満面の笑みを浮かべている時のアス力は年相応、もしくはそれ以下のあどけなさがあるが、今の表情はそのことを微塵も感じさせない。

「実はお姉ちゃんにお願いがあるの」

そこまで言うと言つすぐに見据えていた視線が床に落ちる。それからしばらくして、何か決心をしたようゆっくりと顔をあげて言葉を続ける。

「グラウンへ行くために特殊部隊に配属願いを出そうと考えているの。それでお姉ちゃんに許可をもらうために帰ってきた」

現在、人間と獣人が住んでいるこの大陸は、浮遊大陸でフロードと呼ばれている。そしてその浮遊大陸の下に存在する大陸が地下大陸、グラウンだ。このグラウンは、瘴気に満ちており、その瘴気によって狂わされた生物が住みついている大陸だ。人間はもとより獣人だって住めるような環境ではない。

「だめよ。何でそんな危険なところに行く必要があるのよ。せつかくまともな暮らしができるようになったんだから、そのままでもいいじゃない」

私が断固として認めないのを承知の上で話に来たのだろう。アスカは全くひるまずに真つすぐに見つめてくる。こういう時のアスカは何を言ってもダメなのは経験上分かっている。しかし、だからと言って認めるわけにはいかない。少なくとも、そんなところに行くぐらいなら、まだ獄街にいる方がましなのだから。

「そういうと思ってた。でも、どうしても行きたいの。だってこのままだと人間も獣人も何も分かりあえないまま終わっちゃう」

「なにそれ？どういうこと？」

かねてからアスカは、人間が獣人を受け入れることを望んでいる。でもそれがどうして、グラウンへ行くことへ繋がるのだろうか。視線をそらさずに見つめてくるアスナの表情は真剣そのもので、決して冗談を言っているようには見えない。

「それに関しては、私の口から説明させていただきます。よろしいですね、アスカ」

先程まで黙って聞いていたリーガルが口を開き、説明を始める。

「この大陸が浮遊大陸であるのは周知の事実です。しかし、どのようにして上空を浮遊しており、そのエネルギー源が何なのかは全く知られていません。そして、それはこの大陸を管理する者も例外ではないのです。原理も方法も何も分からない状態で一つだけ分かったことがあります。それは、この浮遊大陸を上空へと浮かせているエネルギーがなくなりつつあるということです」

「エネルギー源が何であるかすら分からない現状で、どうしてなくなってきたと言えるのよ？」

「ここ数百年前から、この大陸で取れる穀物や果物が徐々に減少しています。それに伴い大陸の端から徐々に大地が崩れ落ちていきます。その速度は100年前から急速に増加しています。また、実際にグラウンとフロードとの距離も少しずつではありますが縮んできています。これらの現象の原因はエネルギーの減少のためではないかと言われています」

リーガルは淡々と表情も変えずに話していく。その内容は一見、筋が通っているように見えるが多分そうではない。

「確かにそういう要因も考えられるわ。でも、エネルギー源が減少しなくとも大陸を浮遊させるための原理、方法に何らかの歪みが生じていれば、さっき言ったような現象だってあり得るでしょう？」

それに大陸の状態変化だけで、それがエネルギーの減少が原因と決めつけられない。仮に原理の歪みによって最終的にはエネルギーの減少を生み出していたとしたら、エネルギー源の有無の話をしたって仕方がない。それよりも原理の究明をしなければどう仕様もないではないか。

「確かにあなたの言うとおりです。ですが、どちらが原因であれ何らかの対策を練らねばいけないのには変わりありません。そして、その対策を練る上でもっとも有効な手段がグラウンの調査です」

やっと何が言いたいのかが理解出来てきた。リーガルは浮遊大陸が落ちる前に何らかの対策を練る必要があると考えている。そしてその際に、この大陸がなぜ落ちているのか原因をはつきりさせることだけが解決策ではないと言っているのだ。

確かにフロードは古代文明によって作られたもので、現代の力でこの大陸だけを調査することによってその原理を理解することは不可能だろう。ならば、かつての古代文明が栄えていたと言われているグラウンに降りてその技術の調査をした方が賢明といえるかもしれない。あわよくば、フロードの数十倍の広さをもつと言われているグラウンに住める方法を探るつもりなのだろう。

「グラウンを調査する必要性は理解出来たわ。でも、それがアスカである必要性は感じないわね」

「これだけでは確かに、あなたに正当性があります。ですが……」

淡々と無表情に話していたリーガルの口角が上がる。

「それだけではありません。獣人の血が流れていると、瘴気への耐性が純粹な人間に比べて高いことが判明したのです。人間ですとどんなに重厚な装備をしても耐えられるのはせいぜい数分。ところが、獣人の方々は簡単なマスクを装備するだけで数日間、耐えることができます。さらに……」

「もういいわ」

リーガルの話を遮り、アスカの方へと視線を移す。あまり難しい話が得意でないアスカが居眠りもせずきちんと聞いていたのだろう。リーガルから私に向き直り、見つめてくる。

「アスカ。獣人の血が流れるあなたがグラウンに行くのに適しているのは分かったわ。それだけが理由でグラウンに行きたいの？」

正直な話、それだけだと言うのなら絶対に行かせるつもりはない。だから、それ以外の理由でアスカなりの考えを聞きたかった。あなたの理想とする獣人と人間が和解した世界にどう関係あるのか。

「騎士になつてからずっと考えてたの。騎士になればもう少し人間のことが理解できて受け入れられると思ってた。人間の友達もできたわ。でもね、それじゃ不十分なの。だって、私はお姉ちゃんみたいな暮らしをしている人達も私を受け入れてくれた人たちもまだ互いにいがみ合ってる。お姉ちゃんは人間が嫌いでしょ？」

そうね、と短く返答すると、アスカの新緑の瞳は悲しげに揺らめく。

「友達もね、獣人は嫌いだって言ってた。私が特別なだけだって、嬉しくないわけじゃない。でも、それじゃだめなの。だから、自分なりに調べてみた。この国の歴史や大陸のこと。獣人と人間が何でこんな関係になったのか」

たどたどしく話す内容はあまりまとまっていはいない。それでも、彼女なりに考えて行動したことは分かる。だからこそ、彼女は騎士という肩書を持っているのだから。

「そう。それで？」

「正直よく分からなかった。ただ、獣人が思ってるほど人間も楽な暮らしをしてるわけじゃないってことはわかった。獣人も人間も心に余裕がない。それは、先人が犯した過ちによって限られた資源の中で生きて行くことを強いられるから。そして、その状況をだれも打破しようとしてないから」

俯き今にも泣きそうな妹の頭を優しくなでる。ふわふわの柔らかい髪は、ちよつとした刺激ですぐに痛み、歪んでしまう。けれど、大切にしていればそれはとても触り心地のよい綺麗な髪だ。

アス力は頭を撫でていた手を取り、しっかりと握って顔を上げる。

「だから、そのきっかけになりたいの。できれば、全てを解決したいけど、私はお姉ちゃんみたいに賢くないし、あまり強くないからだから、出来ることをしようと思うの。今の暗い状況をから抜け出すきっかけでいいから」

いつの間にかベットの上で正座しているアス力に両手をがっちり掴まれ、力説される。おそらく、ここでダメだと言っても彼女は

勝手に配属願いをだしてグラウンに行ってしまうだろう。そして、依怙地になって命を落としかねない。それなら、これが一番いいだろう。

「いいわ。行つてらっしゃい」

その言葉にまん丸の瞳を大きく開いて勢いよく抱きつかれる。その拍子にフワリと髪から花の良い香りが鼻腔を刺激する。

「但し、私も一緒にグラウンに行くわ」

今度は驚きのあまりに見開くその瞳を見て、アスナの口は弧を描いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6802x/>

赤銅色のブラネス

2012年1月11日19時56分発行